

初任保育者の担当クラスと子どもの遊びにかかわるときの 問題意識からみた保育士養成校の課題

三好 年江¹⁾*・石橋 由美¹⁾

1) 幼児教育学科

(2006年11月7日受理)

保育者の資質を改善するには、保育士養成校の保育者養成と現職研修とが繋がっていることが重要である。本研究では、保育士養成校のカリキュラム改善の資料を得るために、初任保育者の担当する保育の実態と子どもの遊びにかかわるときの問題意識について調査した。結果は以下の通りであった； 1)初任保育者の多くは零歳から3歳までの乳児保育を複数の保育者で担当する。2)子どもの気持を受容し理解することを大切にしたいと考えている。3)遊びの援助者として子どもにどう働きかけるかという問題に関心をもっていない。4)初任保育者の課題解決の手段として、出身養成校の教員の支援や現職研修を利用したいとは考えていない。そこで、保育実践力を改善するための保育士養成の課題について検討した。

(キーワード) 初任保育者、保育者養成、現職研修、遊び活動

1 はじめに

本研究の目的は、初任保育者が担当するクラスの現状と子どもの遊びにかかわる時の問題意識から、現職教育を見通した保育者養成の在り方を見直す手がかりを得ることである。

保育者(幼稚園教員と保育士を含む)の資質能力は、養成・採用・現職研修の各段階を通じて総合的に形成されるものであり、現職研修を見通した保育士養成カリキュラムの改善が求められている。平成17年1月、中央教育審議会答申「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について¹⁾」でも、幼稚園等施設(幼児に対する教育機能を担う幼稚園や保育所等の施設を言う)における教員等の資質及び専門性の向上のための具体的な施策として、幼稚園教員の養成・採用・研修の改善を求めている。

ところで秋田²⁾は、ヴァンダー・ヴェンの作成した5段階からなる保育者のライフステージ・モ

デルを用いて、保育者の専門性を生涯発達過程における自己の生成と葛藤の歩みとして説明している。段階は「実習生・新任の段階」から、「初任の段階」、「洗練された段階」、「複雑な経験に対処できる段階」、「影響力のある段階」へ進む。段階1の実習生・新任保育者は、「園の中でまだ一人前として扱われていない。・・・指示されたことをその通りにやってみるアシスタントとなったり、・・・実践をその場限りの具体的なこととしてしかとらえられず、自分自身の過去の経験や価値判断のみで対処することが多く、子どもの発達からその行為の意味やつながりをみることはできない。ある状況で起きた行動の原因や生起の過程をいろいろな視点から説明したり、そこから対処の方法を構成的に考えていくような探究をしようとはしない。・・・自分の実経験から、先輩の助言に抵抗しようとすることもあり、経験を重視し、子どもと関わるのには本で学ぶ必要などないと考えたり、また本を読んでもそれを実際の保育に応

*連絡先：三好年江 幼児教育学科 新見公立短期大学 718-8585 新見市西方1263-2

用することが困難である」と説明されている。次の「初任の段階」の保育者は、「保育者として周りからも認められ、正式に仕事の輪の中に関わり始め、徒弟制度の中で学んでいくようになる。」理論を保育に生かせるようになってきているが、自分の保育行為の理由や説明を言語化することはむずかしく、先輩からの助言や指示を積極的に求めて大きく成長する反面うのみにし、過剰な自己犠牲や自己喪失によるフラストレーションを感じてしまうこともある。

したがって保育士養成校は、保育者の生涯発達を視野に入れ、とりわけ初任保育者の現状を見通した保育者養成の在り方が問われるであろう。

保育者の専門性として、鯨岡³⁾は、「保育の計画・立案の専門性」、「両義的対応の専門性」、「ふりかえりの専門性」の3つを挙げている。両義的対応とは、保育実践場面における「いま・ここ」の子どもを受け入れ・認めつつ教え・導くという保育者のかかわりである。また、秋田は、異質の他者である子どもを「わかろうとしつつもわかりえなさどつきあいつつ働きかけ、探求しつづけていく」ところに、「子どもたちの遊んでいる姿を複合的多面的視点から即興的に捉え発達を見通す実践的思考」という専門性が培われていくと指摘している。

そこで保育者の専門性として、実践的思考に裏付けられた両義的対応を可能にするような保育実践力に注目し、子どもの遊びにかかわる時の初任保育者の問題意識をとりあげることにした。本研究では、初任保育者の担当クラスの現状と子どもの遊びに関わるときの保育者の問題意識を調査し、保育士養成校の課題を検討する。

II 方法

1. 調査対象 中国地方A市の平成18年度初任者研修会「遊びと育ち」の参加者78名を対象に、「子どものあそびにかかわるときの課題意識」について質問紙による無記名調査を行った。質問紙配布数は78票、回収数は78票（回収率は100%）。

2. 調査期間 2006年9月2日

3. 調査内容 調査項目は、1) 新任保育者の年齢と経験年数、2) 担当クラスの現状（担当する子どもの年齢と人数、クラスの保育者数）、3) 今年度の保育で大切にしていること、4) 子どもの遊びにかかわるとき配慮していること、5) 子どもの遊びに関わるときの自分の課題、6) 課題の解決方法の、以上6項目であった。回答の方法は、項目4)、5)、6)は選択式（複数回答可）で、その他の項目は自由記述式で回答させた。

III 倫理的配慮

調査結果等についてカテゴリ分析や数量分析で処理し、個人が特定されたり、個人に迷惑をかけたりすることがないように十分配慮することを調査票に明記した。

IV 結果と考察

1. 初任保育者の担当クラスの現状

1) 担当する年齢別クラス

初任保育者が担当するクラスを図1に示した。0歳児を含む2歳未満児クラスが13名（18.1%）、0歳児を含まない2歳未満児クラスは24名（33.3%）、2歳児クラスは15名（20.8%）で初任者の73%が乳児保育を経験しているということがわかる。3歳児クラスは16名（22.2%）、4歳児クラスは2名（2.8%）、5歳児クラスは1名（1.4%）、3歳児、4歳児、5歳児混合クラスが1名（1.4%）であった。これは、多くの乳児クラスが複数担当であることから、まずは先輩保育者の指示に従いながらアシスタントとなったり、実際に先輩保育者の保育を真似たりしながら、就職した保育所の文化に適応しながら、保育の基本を学んでいると考えられる。しかし、木戸⁴⁾の調査によると、保育所実習を終えた養成校の2年生178人のうち、146人（82%）が0～1歳児と接したことがないということで、保育者資格を取得してはいるものの実際におむつ替えや食事の援助はもとより、乳児を抱く経験もなく卒業していることになる。このような初任保育者の担当クラスの現状を考えると、養

成校における乳児保育関連科目の一層の充実が求められると考えられる。例えば、乳児をより身近に捉えられる演習内容や保育実践がより具体的にイメージできる授業の工夫が必要と考えられる。

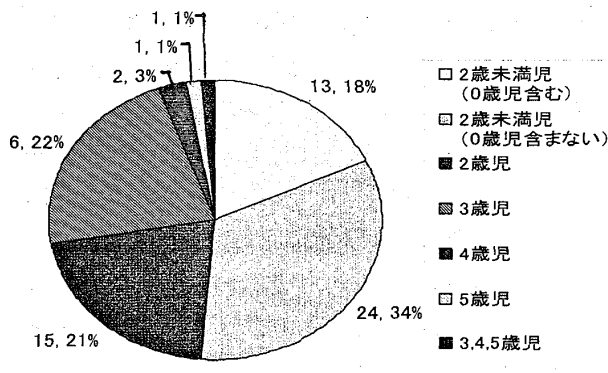


図1 各年齢別クラスを担当する初任保育者の人数、割合 (%)

2) 担当クラスの保育者の人数

担当クラスの保育者の人数は、1人で担当している者は4名 (5.9%) で養成校を卒業後すぐに1人でクラスを担当することは非常に少ないことがわかる。2人でクラスを担当している者が19名 (27.9%)、3人が19名 (27.9%)、4人が15名 (22.1%)、一番多いところで7人が2名であった。つまり、90%以上の初任保育者が複数で担任をしていることになる。一つのクラスを複数で運営 (子どもの保育他) するために、職員間の連携、相互理解、協調性など直接子どもを保育することとは別の人間関係力が要求されることとなる。しかし、保育学生の中には、「人とコミュニケーションをとるのが苦手である」とか、「共同で作業をすると気がつかない疲れるからできれば1人でやりたい」と共同の作業を嫌う傾向が見られたり、傷つくことを避け自分から新しい関係づくりに抵抗を示したりする学生もいる。現在、養成校では、このような保育学生の人間関係力をどう育てるかが課題であり、グループ演習や体験学習などが授業で取り込まれている。今後は、さらに卒後の職場環境を視野にいれ、人間関係力を高める授業の改善の必要があると考える。

2 保育で大切にしたいこと

ここでは、「今年度の保育で大切にしたいことはなにか」という問いに対して自由記述させた内容を分析した。その内容は大きくは次の5つに分けられた。①子どもの気持ち (31人、41%)、②保育者としての態度 (20人、26%)、③子どもの発達理解とその援助 (16人、21%)、④保育の環境 (3人、4%) ⑤子どもとの関係作り (信頼関係) 4人 (5%) であった (図2参照)。①「子どもの気持ち」の具体的な記述内容は、「一人一人の子どもの気持ちを理解したい」、「子どもの気持ちに寄り添って考えたい」、「子どもの立場になって考えたい」などであった。次に多かった②「保育者としての態度」の具体的な記述内容は、「笑顔でいること」、「優しくかかわること」、「積極的に行動する」など、初任者が自分自身の行動に目を向け、保育者のあるべき姿として大切にしたいとして挙げている。③「子どもの発達の理解とその援助」の具体的な記述内容は、「それぞれの子どもの成長や発達にあった遊びや言葉がけを大切にしたい」というように、発達の援助者としての自分を意識していることがわかる。

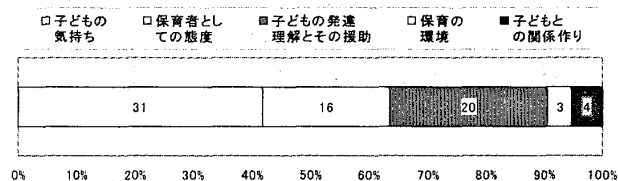


図2 初任保育者が保育で大切にしたいこと (人数)

この結果から、初任者の4割がいわば保育の基本である「子どもの気持ちを理解し、受容的な態度」を意識していることがわかる。これは、「保育所保育指針」では「様々な欲求を適切に満たし」や「一人一人の気持ちを受け止め」のような表現で繰り返し記述されていることでもあり、養成校の教員も基本的なこととして授業の中で教授している内容であることから、初任保育者にとっても、最も大切なこととして認識されているようである。

3 新任保育者の「子どもの遊びへの関わり」に

関する問題意識

子どもの遊びに関わるときの配慮について、自分の課題と考えることを一つ選択させた（表1参照）。また、選択肢にない自己課題については、自由記述式で回答させた。

上位4項目についてしてみると、一番多かったのが「子どもの興味や遊びの発展とともに、環境構成を工夫する」（28人；38.4%）であり、次に多かったのが、「どうしたら遊びが面白くなるのか子どもと一緒に考え話し合う」（10人；13.7%）であった。次が「子どもの気持や考えを聞くなど、子どもの主体性を大切にする」（9人；12.3%）、続いて「子どもの興味・関心にあった遊びを考える」（8人；11%）であった。これら、上位に挙がっているものの共通点は、「子ども理解」であり、子どもを主体に考えるなど保育の本質にかかわること、初任保育者はこの重要性を十分理解していることがわかる。

次に下位の項目についてみると、「遊びの面白さが伝わるように遊んでみせる」（2人；2.7%）、「子どもと一緒に遊びを楽しむ」（2人；2.7%）であった。これらの項目は、保育者の遊びへの導きや働きかけであり、それを課題と考える初任保育者が1割に満たないという結果から、初任保育者は遊びの援助者として自分が子どもにどう働きかけるかという問題意識が弱いという一面が推測される。

4 初任保育者の「子どもの遊びへのかかわり」に関する問題解決の方法

初任保育者のとる問題解決の方法が図3に示されている（選択式の複数回答）。解決方法として、回答が最も多かったのが「先輩保育者に相談する」（63人；84%）であった。最も身近で、共感的理解を得やすいということから先輩保育者が良きアドバイザーになり、初任保育者が徒弟制度のなかで学び始めていることがわかる。次に多かった回答は、「保育者の友達に相談する」（50人；66.7%）であった。友達ということで、保育歴も本人とほとんどかわらないことが推測され、アドバイスをもらうというより、聞いてもらうことで自分の考えを整理していくという意味合いが大きいのではないかと考えられる。次に、「雑誌などで調べる」（37人；49.3%）、続いて、「研修会に参加する」（13人；17.3%）であった。最も少数派だったのが、「出身校の教員に相談する」（6人；8%）であった。

以上のことから、初任保育者が課題を持ったとき、養成校は遠い存在であることがわかった。保育者としての専門性を高め、よりよい保育実践を目指すために、養成校の教員は、卒業後の保育者としての育ちを見守り支援していく体制をつくるなど、卒後教育の体制をつくる必要があると考えられる。また、初任保育者にとっては、専門性を高める上で、非常に重要と考えられている研修につい

表1 現在の自分の課題として選択した初任保育者の人数

1. 子どもの興味・関心にあった遊びを考える。	8	(11.0)
2. 子どもの気持や考えを聞くなど、子どもの主体性を大切にする。	9	(12.0)
3. 子どもの気持に共感し、言葉をかける。	5	(6.7)
4. 子どもと一緒に遊びを楽しむ。	2	(2.7)
5. 子どもと子どもの関係をつなげるように関わる。	4	(5.5)
6. どうしたら遊びがおもしろくなるか、子どもと一緒に考え、話し合う。	10	(13.7)
7. 子どもの興味や遊びの発展とともに、環境構成を工夫する。	28	(38.4)
8. 遊び集団の雰囲気をつかんで、働きかけを工夫する。	3	(4.1)
9. 子どもの機嫌や情緒の安定に配慮する。	2	(2.7)
10. 色々なことに興味を持ち、不思議がったり、面白かったりしたことを言葉にする。	0	(0.0)
11. 遊びの面白さが伝わるように遊んでみせる。	2	(2.7)
計	73	(100.0)

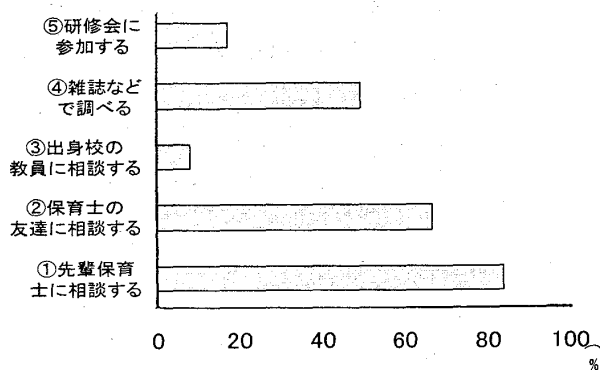


図3 初任保育者の問題解決の方法（複数回答）

でも認識が低いということがわかった。ここで、養成校が現場と連携し、現場のニーズにあった研修を企画する必要があると考えられる。

IV まとめ

今回は、A市の初任保育者という限られた調査対象と、子どもの遊びに関わるときの意識という点から初任保育者の課題を探ったため、養成の在り方の手がかりについて一部の資料を得ることにとどまった。以下の3つが本研究で得られた示唆である。

まず、初任保育者の配属クラスについて、乳児クラスが7割、複数担任が9割という現状であるにもかかわらず、0から1歳の乳児に触れた経験がないという学生が80%以上いるという現実があることから、養成校における乳児保育科目において、より体験的に乳児を理解できる授業内容や教材の工夫が挙げられる。また、初任保育者はクラスを複数担任で担当する機会が多いので、他人と良好な関係を構築することを苦手とする傾向のある保育学生に対しては、養成校において人間関係力を構築するカリキュラムや授業の工夫が重要になることがわかる。特に、難関の採用試験を突破し、就職した初任保育者がすぐにやめてしまう原因に、本来の保育や仕事内容ではなく人間関係の悩みを挙げるものも少なくない現状から、組織の構成員としての視野を持ち、自己を発揮しながらも他者と協調していく態度や能力を身につけていけるような体験的学習の機会の養成カリキュラムの

改善が求められる。

次に保育実践力を重視したカリキュラムの改善について検討する。幼稚園教員の資質向上に関する調査研究協力者会議報告書「養成と採用・現職の円滑な接続によるトータルな教員の資質向上」(2002)では、養成段階から採用を経て現職の教育活動へ円滑に移行するためには、養成段階において、実践力を重視したカリキュラムの検討、授業における理論と実践を結びつけることが必要であると指摘されている。

本調査では、多くの初任保育者は日常の保育の中で子どもの気持ちを理解し、受容的な態度を大切にしたいと考えていて、子どもの遊びへのかかわりの面において、子どもの興味や遊びの発展とともに、環境構成を工夫することが課題であると回答している。これらのことから初任保育者は、子ども理解を基本とし、子どもを主体と考えるなど、保育の本質の重要性は十分理解していると考えられる。しかし、保育者の遊びへの導きや働きかけを課題と考える初任保育者が1割に満たない結果から、援助者として自分が子どもにどう働きかけるかの視点が弱いことがわかる。これは、鯨岡⁹⁾が保育者の専門性の一つとしてあげている「受け入れ認めつつ、教え導く」という両義的対応についてあまり意識されていないということではないだろうか。養成校においては保育者の専門性を明確にしながらか「援助」のことばに隠れがちな「教え導く」力を育成することを意識する必要があると考える。また、近年、保育者の遊びの体験不足が指摘されているが、「教え導く」力を育成するためには、保育者自身が子どもに遊びを提案したり、遊びを展開したりすることができる豊かな遊び体験をもつことが大切であり、実践力を高めることができるカリキュラムの検討や授業内容の工夫が緊要であると考えられる。

最後に、問題解決の方法について、ほとんどの初任保育者が一番身近である先輩保育者に相談すると回答しており、研修会参加や、養成校の教員に相談する者は、1割に満たなかった。保育実践上の課題が出てきたとき、初任保育者が身近な先輩保育者に相談するのはごく自然な解決方法であると考えられる。しかし、研修参加や養成校の教員と

の連携は、広い視野で、また専門的な観点から自らの保育を見つめ直し創造していく機会を与えてくれるものとしてとても重要な役割を担うと考える。したがって養成校は、研修の意義や卒後の養成校の役割について十分に理解し、卒後においても、常に専門性を高めていこうとする姿勢を持ち続けられるような養成のあり方を検討する必要があると考える。

文献

- 1) 中央教育審議会：「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育に在り方について（答申の概要）」2005
- 2) 秋田喜代美：秋田喜代美「保育者のライフステージと危機」『発達』83, 2000. P50
- 3) 鯨岡峻：「保育者の専門性とはなにか」『発達』（ミネルヴァ書房），83, 53-60, 2000
- 4) 木戸由美他 「日本保育学会第58回大会発表論文集」2005 P380-381
- 5) *ibid* 3

The Challenges of Training School for Nursery Teachers in View of Newly Qualified Teachers: the Circumstances of Care Work and the Problems of Interacting with Children in Play Activities.

Toshie MIYOSHI, Yumi ISHIBASHI

The Department of Early Childhood Education, Niimi College, 1263-2, Nishigata, Niimi, Okayama 718-8585 Japan

Summary

In order to improve the quality and abilities of nursery teachers, it is important that nursery teacher training for obtaining the nursery teacher certificate in school will be linked to in-service training. In this study, to use the data in reforming the nursery teacher training curriculum in schools, we investigated the circumstances of care work by newly qualified nursery teachers in their first year of work, and the problems when they interact with and support children to foster their enthusiasm for play activities. The result was as follows; 1) Most of the newly qualified teachers worked with other teachers to give care for children aged zero to three years. 2) They thought that it was important to accept and understand the mind of children. 3) They felt no concern about the problem of how to interact with and support children to foster their enthusiasm for play activities. 4) In solving the problems of their care work, they did not need support and in-service training offered by their graduated school teachers. We discussed the challenges of getting students sufficient abilities to practice caring and teaching.

Key words: newly qualified nursery teachers, nursery teacher training, in-service training, children's play activities.